

詩篇65篇より

0 指揮者のために。ダビデの賛歌。歌

1 神よ。あなたの御前には静けさがあり、シオンには賛美があります。あなたに誓いが果たされますように。

2 祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。

3 咎が私を圧倒しています。しかし、あなたは、私たちのそむきの罪を赦してくださいます。

4 幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。私たちは、あなたの家、あなたの聖なる宮の良いもので満ち足りるでしょう。

5 私たちの救いの神よ。あなたは、恐ろしい事柄をもって、義のうちに私たちに答えられます。あなたは、地のすべての果て果て、遠い大海の、信頼の的です。

6 あなたは、御力によって山々を堅く建て、力を帯びておられます。

7 あなたは、海のとどろき、その大波のとどろき、また国々の民の騒ぎを静められます。

8 地の果て果てに住む者もあなたの数々のしるしを恐れます。あなたは、朝と夕べの起こる所を、高らかに歌うようにされます。

9 あなたは、地を訪れ、水を注ぎ、これを大いに豊かにされます。神の川は水で満ちています。あなたは、こうして地の下ごしらえをし、彼らの穀物を作ってくださいます。

10 地のあぜみぞを水で満たし、そのうねをならし、夕立で地を柔らかにし、その生長を祝福されます。

11 あなたは、その年に、御恵みの冠をかぶらせ、あなたの通られた跡にはあぶらがしたたっています。

12 荒野の牧場はしたり、もろもろの丘も喜びをまっています。

13 牧草地は羊の群れを着、もろもろの谷は穀物をおおいとしています。まことに喜び叫び、歌っています。

50篇以来、長らくダビデの苦しみイメージが続いてきましたが、本篇に来てようやく明るい調子になります。どのような背景を持つ詩であるか、諸説ありますが、9節以下の内容が「収穫の喜び」を歌うものであるところから、「収穫感謝の詩」「来年の豊作を願う詩」と理解する人もいます。

本篇は三部構成になっています。

1～4節：礼拝所におられる神

5～8節：全地で畏れられる神

9～13節：田畑に恵みを注ぐ神

第一のポイントである1～4節には、罪の責めに苦しむ詩人の姿があります。「**咎が私を圧倒しています**」(3a節)という表現には深い共感を覚えます。直訳すると「罪の事柄(言葉)は私たちよりも強い」となりますが、私たちは自覚的に罪を犯したとき、神の御前に出るのに強い躊躇^{ためら}いを覚えるのではないのでしょうか。罪は、神と人の関係を妨げる障壁となっていますので、それは取り除けられなくてはなりません。必要なのは罪の告白です。神は私たちのすべてをご存知であり、何も隠すことはできないのですから、いつまでもそれを引きずって神との悪い関係のままでいるのではなく、正直に告白し、赦しをいただくことが大切です。そのとき、神は「**祈りを聞かれ**」(2節)、「**そむきの罪を赦してください**」(3b節)。

「**あなたの御前には静けさがあり**」(1a節)という表現にも注目しましょう。ここでは「静けさは賛美」という変わった表現が使われています。神の御前で自分の願望を並べ立てるのではなく、静まって御心に耳を傾け、神の思いと一つになったところに真の賛美が生まれるということでしょう。今や詩人は、「赦された者」として、「**あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人**」(4節)と自らを呼びます。神との関係の回復は、罪の告白によってもたらされたのでした。

第二のポイントである5～8節では、視野が大きく広げられ、被造物全体が神を畏れる様子が歌われます。「**恐ろしい事柄**」(5b節)という表現から思い浮かべるのは、出エジプトのときに神がエジプトにもたらされた10の災いです。神が自然界を掌握しておられることが明らかになった出来事でした。確かに、人間は大自然の脅威の前になす術なきことを、昨今も経験しているではありませんか。「**大海**」「**山々**」「**海のとどろき**」「**大波のとどろき**」(5～7節)といった表現は、人を一挙に飲み込んでしまう自然界の力を思わせます。しかし、それらすべては神の支配の下にあり、神が「**黙れ、静まれ**」と言われれば瞬く間に沈黙する(マルコ4:39)。

「**とどろき**」「**騒ぎ**」(7節)という表現は、世の喧騒、神に逆らう人間界の騒ぎをも思わせます(詩篇2:1-3)。自らの罪を認めぬ者、聖なる神の御前に余裕^{しゃくしゃく}綽々^{しゃくしゃく}の顔で行く者は、自らを危険な状態に晒しています。神の民を平気で迫害していたエジプトは、神の「**義のうちに**」(5節)自分たちがやってきたことの答えを見たのです。

第三のポイントである9～13節では、田園的な風景が広がります。大自然を支配しておられる神は、人間に豊かな恵みを与えてくださってもいる。この恵みに気づいている人間はどれほどいるのでしょうか。神は天にある「**神の川**」(9b節)から「**水を注ぎ**(雨を降らせ)」(9a節)、「**穀物を作ってください**」(9c節)。「**あぜみぞ**」「**うね**」(10a節)というものは、人間が試行錯誤の末、田畑の管理のために作り出したものですが、神はその労働を軽んずることなく、豊作をもたらす「**夕立**」(10b節)でもって潤してくださいます。「**御恵みの冠**」(11a節)とは、豊作の喜びを味わう時期のことで、風に靡^{ねび}く穂波^{ほなみ}は「**あなたの(神が)通られた跡**」(11b節)のように見えると詩人は賛美するのです。

13節では、青々とした大地で草を食む^は羊の群れ、金色の稲穂で覆われた土地がまるで「衣服」のようなイメージで描かれています。動植物が地に満ちている情景を、神様は目を細めて見ておられるということでしょう。

神を畏れる人には、農耕の営みの中さえ神を見出します。本篇を一貫している思想は「神への畏れ」という一点に尽きるでしょう。「礼拝所」「全地」「田畑」の間に何の関わりがあるかと言われますか。いいえ、私たちが主日に礼拝をささげるところにも、全世界の諸問題を見るときにも、日々の食事にあるところにも、一切の出来事の中に神の御業を見出すことができるのです。